

社会科（歴史的分野）学習指導案

展開学年 3 年

1 単元名「第 6 章 二度の世界大戦と日本」

1 節 第一次世界大戦と日本 2 節 大正デモクラシーの時代」

2 単元について

（1）単元観

本単元は、学習指導要領の社会科歴史的分野「（5）近代の世界と日本 ウ」に

「第 1 次世界大戦前後の国際情勢及び我が国の動きと、大戦後に国際平和への努力がなされたことを理解させる」とある。

続いて「内容の取扱い」として

第一次世界大戦の背景とその影響 日本の参戦 ロシア革命 民族運動の高まりと国際協調の動き 中国や朝鮮における民族運動の高まり 国際連盟の設立や軍縮条約の締結 国民の政治的自覚の高まりと文化の大衆化 政党政治の発達 民主主義思想の普及 社会運動の展開 大都市の発達や都市に住む人々の生活様式や意識の変化 新聞・雑誌などの普及 ラジオ放送の開始（以上、抜粋）

が挙げられている。つまり第 1 次世界大戦という人類史上未曾有の事態がどのようにして起こり、それがどのような推移をたどったのか。またそこに日本がどう関わり、影響を受けたのか。そして同じ時期に大正デモクラシーと呼ばれる「我が国の国民の政治的自覚の高まり」が起こったことを理解するということである。

そこで「明治・大正時代の日本と世界の関係は、どのように変わったのか」という単元を貫く問いを設定する。明治維新に始まる日本の近代化政策は、江戸時代における遅れを取り戻すために（たとえば学制、徴兵令、殖産興業などが）急速に行われたが、条約改正の難航に見られるように、日本は後進国として世界で扱われていた。それでも約半世紀にわたる努力のおかげで立憲制国家となり、富国強兵を実現したのである。大正時代はそうした明治時代の発展の上に立ち、日本が「一等国」として世界の中で確たる地位（植民地を得て、国際連盟の常任理事国になり、重化学工業も発達）を占めるようになるまでの過程である。大正時代の特徴をとらえるうえでは、既習の明治時代とのつながりを意識しながら「世界に遅れを取っていた日本が、なんとか追い上げて列強の背中が見えてきた」といったイメージを生徒に持たせたい。それは一つの要因ではなく、帝国主義国による植民地の獲得競争という世界情勢に対する日本の対応という点や、政治制度の面で憲法や議会を持ち、アジアで初めての立憲制国家としての近代化を達成したという点、殖産興業政策によって軽工業から重化学工業の発展を急速に進め、国力を充実させた点などから多面的に認識されることが必要である。そして第 1 次世界大戦で連合国の一員としてドイツと山東省で戦い、アメリカと共同でシベリア出兵を行う日本の行動や、大戦終了後に国際連盟の常任理事国になったことは「日本が世界の中で役割を果たせるようになってきた」姿であると認識してほしい。同時に日本の中国大陸における権益や領土の拡大という野望や軍事的な成長を、列強から警戒され、不信を招きつつある状況がある。第 1 次世界大戦で総力戦を経験しなかった日本が、幾度かの恐慌を経て、満州事変に踏み出してしまうことが、第 2 次世界大戦の惨禍へとつながっていくことも忘れてはな

らない。

生徒がどのように認識を深めたのかは、文章で表現させて確かめる形をとりたい。対話的な授業の中では、自分の考えを持ってそれを表現し、相手の考えを聞いて自分の意見を再考していているので、最後には、自分の発言したことを一つの考えとしてまとめて、表現する活動を行いたい。それが授業のまとめにもなるし、評価材料として、個々の生徒の認識を確かめたい。

また、第 1 次世界大戦後に世界が平和に向けての仕組みづくりを進める中で、総力戦を支えた民衆の政治参加の動きが加速し、各国で普通選挙が実現。女性の政治参加も認められていくようになり、民主主義が広がりを見せる。加えてロシア革命＝労働者による革命の達成が、各国の労働運動に勢いをつけ、イギリスでの労働党内閣の成立（1924）を見ることになる。

そうした流れが、日本にあったポーツマス条約に対する不満や藩閥政治に対する抵抗（第 1 次護憲運動）といったエネルギーに加わることで、大正デモクラシーを国民的な運動へと拡大していったことを生徒に認識させたい。大戦景気やシベリア出兵による物価の高騰が米騒動を全国的な騒乱に発展させ、本格的な政党内閣の成立を呼んだり、ロシア革命が労働争議や小作争議、日本共産党の結成にとどまらず、全国水平社の結成や女性運動といった社会運動全体に影響を与えたりした。ここでも世界の出来事や世界情勢が日本の国民の意識や行動に大きな影響を与えており、関係性でとらえることができるようにしたい。今回の学習計画では第 1 次世界大戦のまとまりを学習し、一度振り返りを行って（本時）から大正デモクラシーのまとまりを学習するという計画にした。明治・大正時代の日本と世界との関係をしっかりと認識した後で、世界的な民主主義の広がりの中で日本に普通選挙法が成立するまでの過程を理解させていきたい。

（2）単元の学習計画（9 時間扱い）（●：学習改善につなげる評価、○：評定に用いる評価）

時	ねらい	主な学習活動	評価の観点			評価基準
			知	思	態	
1	第 1 次世界大戦はなぜ世界大戦になったのか	調べ学習 見通しを持つ	●		●	
2	ロシア革命は市民革命と何が違うのか	まとめ学習		●		
3	日本はどこで第 1 次世界大戦に参加したのか	資料の読み取り	●			
4	第 1 次世界大戦はどのように終わったのか	まとめ学習		●		
5	世界の平和に向けてどのようなことが行われたのか	ワークシート	●			
6	近代前半の世界における日本の地位の変容を振り返る	話し合い 学習を振り返る ワークシート		○	○	
7	政党内閣はどのようにして	ワークシート	●			

	誕生したのか				
8	社会運動に立ち上がったのはどのような人たちか	まとめ学習	●		
9	大正文化が大衆文化なのはなぜか	ワークシート	●		○

(3) 生徒の実態 (3年A組 合計 29名 男子 12名 女子 17名)

生徒一人一人が学習課題を自分のものとしてとらえ、主体的で深い学びを実現するために、本校では授業における対話や学びあいを研究主題として掲げ、取り組んできた。本時についても生徒一人ひとりが自分の考えを持ち、それを対話の中で表現できるような学習課題を設定し、世界の出来事と日本の関連性を自分の中で総合的に認識できるようにしたい。

○歴史や世界史に対する関心、話し合い学習についてのアンケート調査 (別紙参照)

3 単元の目標

(1) 第1次世界大戦が起こった背景 (ヨーロッパ諸国間の対立や民族問題) やその経緯、特に日本の参戦について調べ、その終結や平和への世界的な努力について理解することができる。

【知識・技能】

(2) 近代前半の世界における日本の地位の変容の要因を考察することができる。

【思考・表現・判断】

(3) 第1次世界大戦後の世界的な民主主義や社会運動の広がりを受けて、日本でも様々な国民の政治参加の動きが実現したことを調べ、人権や平和を訴える人々の努力を追及する。

【学びに向かう力、人間性】

4 本時

(1) 本時の目標

近代前半の日本の世界における地位の変容について、今まで学習してきた内容からステップチャートを作成し、それをもとに話し合うことで、世界の中での日本の立ち位置の変化の要因を多面的に認識する。

【思考・判断・表現】

(2) 本時の展開【第8時】

過程	学習内容と活動	留意点(○)及び評価(◇)
導入 5分	○資料を提示する「岩倉使節団」「新渡戸稲造」の写真 質問「この人達は誰ですか」「岩倉使節団」 「明治時代の初め、欧米に条約改正に行った岩倉使節団は成功しましたか」「失敗した」 質問「この人は誰ですか」「新渡戸稲造」「何をした人ですか」 「国際連盟の事務局次長」	○大型テレビを使用

	「明治の初めに欧米に相手にされなかった日本が、大正時代には国際連盟で常任理事国という中心的な役割を果たすようになりました。日本の世界での地位はどのように変わったのでしょうか？」	
展開 ① 15分	○発問 <u>「日本が世界に認められるようになったのはなぜだろう？」</u>【学習課題】 ○ギガタブの課題を開き、ジャムボードを使用する。 ○発問「明治・大正時代の日本の世界での地位の変化を説明できるようなステップチャートを作ろう」【個人作業】 付箋の内容はこちらで事前に用意しておく。 ○付箋 日清戦争（1894） 条約改正（1894・1911） 日英同盟（1902） 韓国併合（1910） 第一次世界大戦（1914） 大日本帝国憲法（1889） 第1回帝国議会（1890） 富国強兵 官営模範工場 製糸輸出世界一（1909） 大戦景気 ○「岩倉使節団」をスタート、「国際連盟常任理事国」をゴールに設定する。 →生徒個人でステップチャートを作成する。 〈ステップチャート例1〉 <pre> graph TD A[岩倉使節団] --> B[富国強兵] B --> C[官営模範工場] C --> D[製糸輸出世界一（1909）] D --> E[大戦景気] E --> F[国際連盟常任理事国] </pre> 〈ステップチャート例2〉 <pre> graph TD A[岩倉使節団] --> B[欧化政策] B --> C[ノルマントン号事件] C --> D[大日本帝国憲法（1889）] D --> E[第1回帝国議会（1890）] E --> F[条約改正（1894・1911）] F --> G[国際連盟常任理事国] </pre>	○学習課題を提示する。 ○班は4～6人班で行う。 ①最初は出来事の起こった順に並べてみる。 ②付箋は全て使わなくてもよい。出来事のつながりを考えながら、付箋を選んでいく。 ③付箋は自分で増やしてもよい。その時は色を変える。自分の見つけた出来事の手がかりに、関連する歴史的事象を加えていく。 ④枝分かれさせたり、大きな流れと具体的な出来事を区別したりする。 ⑤矢印や結び付けた理由を書き込んでいったりする。 ◇明治・大正時代の出来事を正しく関連付けて、ステップチャートを作成できた。
展開 ②	○「日本が世界に認められるようになったのはなぜだろう」について、自分で作ったステップチャートを見せながら、班員に説明する。	○班で司会を決める。 ○自分の考えた所まで、説明できれば良い。足りない所があ

20分	【回答例】 ・日本が富国強兵に取り組み、経済力を上げたため ・日本が憲法や議会といった制度を整えて、アジア初の立憲制国家になったから、条約改正に応じた。 など。 →班員同士が異なる視点で作成したステップチャートを交流することで、多面的な認識を得ることができる。 ○各班から学級全体に発表し、交流する。 ・帝国主義国として植民地を得たこと（帝国主義） ・資本主義国として工業を発展させたこと（経済） ・政治制度を近代化し、立憲制国家になったこと（政治制度） →視点を発見できていたら、学級全体で共有する。出てこなければ、可能性のあるものを全体で深めても良い	ったら、新しい付箋を増やしたり、班で考えたりしてみても良い。 ○班員の意見を聞いて、自分の認識を広めていく。 ◇日本がなぜ世界に認められるようになったか、説明できた。 a ステップチャートを使用して b 理由を明確にして説明することができた。
まとめ 10分	○振り返りシートを記入する。 「日本が世界に認められるようになったのはなぜだろう」について、班や学級での発表を聞いたうえで、自分の考えを文章として記述する。 ○何人かに発表してもらおう。 他の人の話を聞いて、新しい視点を入れることができたか。 次時からは大正時代の日本国内の政治状況を学習する。「国民の政治参加はどのように発展していくんだろう？」と投げかける。	○ワークシートに記入する。 ◇日本がなぜ世界に認められるようになったか a 事実に基づいて b 理由を明確にして c 複数の視点から記述することができた。 ○ワークシートと振り返りシートは回収する。

(3) 評価		基準		
評価規準	A	B	C	
日本と世界の関係の変容について、今までの学習を振り返って社会的事象同士の関連を考察し、記述する。	◇ワークシートの回収 社会的事象の関連をとらえて、日本の世界での立ち位置の変容を記述できた。	◇ワークシートの回収 社会的事象から、大正時代の日本の世界での立ち位置を記述できた。	◇ワークシートの回収 記述において a 事実認識に間違いがある b 社会的事象同士の関係の理解が十分ではない c 文章として意味が通らないなどのミスがある。	

5 思考の構造図

【事実に認識の第3段階】

世界的な平和は、対立する国や陣営同士の勢力や戦力の均衡がもたらすのではなく、世界の国々が参加した、国際的な協調の努力によって達成される。

【事実に認識の第1段階・第2段階】

A 第1次世界大戦はヨーロッパにおける諸国間の対立や民族問題を背景として起こった。

- a イギリスはロシア、フランスと三国協商を成立させた。
- b 帝国主義の拡大の中で、ドイツが強国となりオーストリア、イタリアと3国同盟を結んだ。
- c オスマン帝国の衰退に伴い、スラブ民族の独立を支援しようとしたロシアと、スラブ民族の独立を抑えようとしたオーストリアがバルカン半島で対立した。
- d 「戦力の均衡」が大きな戦争をもたらさないと考えていたヨーロッパ諸国の思惑は外れ、サラエボ事件（セルビア対オーストリア）をきっかけに多国間の戦争が始まり、長期化していった。
- e 戦争が長期化する中で、新兵器の開発や大量の兵士や物資を戦場に送るため、「総力戦」となった。
- f 戦争の長期化の中で、戦局を有利にするために日本やアメリカが参戦することになり、アジア・太平洋地域に広がりを持つ世界大戦となった。

B 日本は山東省のドイツ権益を得て、大戦景気に沸くなど。戦場にならなかったことを幸いに近代国家として、世界の中での存在感を大きくしていく。

- a 日英同盟を理由に、中華民国の山東省にいたドイツ軍を攻め、勝利を収めた。その後中華民国に対して21か条の要求を出し、ドイツ権益や遼東半島での権益を得ることになった。
- b 大戦中にロシア革命が起こり、労働者が革命を起こして王政を倒し、権力の座に就いた。
- c 社会主義の拡大を恐れる国々とともに、ロシアの反革命勢力を支援するため、シベリア出兵を行った（大戦終了後も含め、5年以上。各国の中で最長。）
- d パリ講和会議（ベルサイユ条約）の中で、21か条の要求をヨーロッパ諸国に認めさせる。
- e ヨーロッパ諸国は総力戦に集中する中で、アジア諸国や日本への輸出品が途絶え、日本の国内産業や中国市場への輸出産業、軍需産業で好況が続く（大戦景気）、重工業が発展した。

C 戦争が終わり、平和な世界の構築に向けて、様々な動きが起こった。

- a 第一次世界大戦のパリ講和会議で戦争が終わった。（ドイツの降伏。革命で王政も倒れる）
- b アメリカ大統領ウイルソンの唱えた「民族自決」の原則が、東ヨーロッパ中心に植民地の独立を実現させた。（大戦は民主主義国家 v s 専制主義国家（王政）の戦いと意味づけていたため）
- c ウイルソン大統領の提案で、世界平和と国際協調のための組織として、国際連盟が成立した
- d 日本は国際連盟で常任理事国になり、新渡戸稲造が事務局次長として活躍した。
- e アメリカの呼びかけでワシントン会議が行われ、海軍の軍備縮小が実現した。
- f ヨーロッパ各国では普通選挙や女性の選挙権獲得、労働者の権利拡大を求める運動が高まった。

D 日本でも国民の政治的自覚の高まりから、民主主義の進展が実現した。

- a 桂太郎が首相になり、議会を無視した政治を行うと、「藩閥政治を倒し、憲政を守る」運動が高まり、桂内閣を退陣に追い込んだ（第1次護憲運動）
- b シベリア出兵を見越した米の買い占めから起こった米騒動を、軍隊を使って鎮圧した寺内正毅内閣が退陣した。そこで衆議院第一党の立憲政友会の党員で組織する、初めての本格的な政党内閣が誕生した。首相は平民出身の原敬であった。
- c 吉野作造の「民本主義」や美濃部達吉の「天皇機関説」が大正デモクラシーを進める国民の思想的な基盤となった。
- d 第1次世界大戦の終戦と同時に社会運動が活発になった。1920年に第1回のメーデーが行われ、日本社会主義同盟や新婦人協会が設立、翌年には日本労働総同盟、次の年に日本農民組合、日本共産党、全国水平社が設立された。労働者や農民、社会主義者や女性、被差別部落の人々も人間としての平等を勝ち取るための運動を行った。
- e 第2次護憲運動の中心人物であった加藤高明首相が1925年に普通選挙法を成立させ、満25歳以上の男子全員に選挙権が与えられ、有権者は4倍に増加した。納税額による制限は廃止されたが、女性の参政権は認められなかった。また同年に治安維持法を制定し、共産主義の拡大に備えたが、次第に対象が拡大され、日本の言論の自由が弾圧されることになった。
- f 大正文化は教育の広がりやマスメディアの発達によって、大衆文化として発展した。